

# 新分野の展開に期待

## 第14回セラミド研究会学術集会

第14回セラミド研究会学術集会（五十嵐靖之会長）は10月21・22日、都内の会議場とwebによるハイブリット開催した。学術集会は、京都大学大学院農学研究科の菅原達也氏「スフィンゴ脂質の食理学的研究」など招待講演5題と一般講演13題で構成、ヤング・インベストリング・アワードは順天堂大学の藤田未麗氏が受賞した。初日集会后に開かれた運営委員会で新会長に木原章雄氏（北大）、副会長に花田賢太郎氏（国立感染症研究所）と向井克之氏（ダイセル）が選出された。

### ☆招待講演



五十嵐靖之氏



木原章雄氏

スタミン薬しかなく、根本的な治療法の開発が急務の課題となっている。とし、末梢性のかゆみから臓器の炎症に起因する中枢性のかゆみまで、広範囲な研究を紹介し、かゆみ特有の神経伝達物質から治療薬開発について最新の成果を披露した。

た。これらの結果から「素材は、アルツハイマー病などによる認知機能の低下を抑制・維持する可能性があり、予防・治療への活用が期待されるとした。」

東京農工大学の三浦豊氏は、食事中的スフィンゴ脂質の中でも卵やミルクに多く含まれるスフィンゴミエリン（SPM）の生理機能の最新研究成果を報告した。演者らは培養細胞系や動物モデルを用いて食事性SPMを解析し、抗炎症作用、抗がん作用、腸管透過性に関する作用を見出し、今回、その作用機構の一端を紹介するとともに、SPMの腸管透過性で、生体に吸収されにくい物質の吸収を高める可能性に言及した。

順天堂大学かゆみ研究センターの高森建二氏は「かゆみのメカニズム―バリア異常は難治性かゆみを誘導する―」と題し

「ス」、「トマト種子エキ」についても招待講演で最新研究を紹介し、セラミド合成や皮膚の弾力性改善作用など、セラミド関連食品への配合へ向け、参加者の関心を呼んだ。

### ☆一般講演

菅原達也氏は、米国人は動物由来が中心、日本では植物由来セラミドが多くを占める。かつては大腸がん発症抑制などの研究が多かったが、最近

消化機能、代謝変化、機能性とその作用について詳細に報告した。

ダイセルは、こんにゃくセラミドによるヒト脳内アミロイドβ蓄積抑制

内に移行することをすでに明らかにしている。今回のヒト試験は、60歳

「こんにゃく芋由来セラミド（KCar）」はヒト表皮角化細胞におけるセラミド増加による保湿作用や、メラニン生成に

は皮膚への効果が注目されているとし、学会報告リストを示した。また、哺乳動物、高等植物、海産品、酵母の化学構造の違いから、アメリカオオト種子由来licoperosidイカや醤油粕由来セラミドなど最新研究に言及。さらに、13Cラベル化スフィンゴ脂質による消化

吸収機構、代謝変化、機能性とその作用について詳細に報告した。

消化機能、代謝変化、機能性とその作用について詳細に報告した。

消化機能、代謝変化、機能性とその作用について詳細に報告した。

消化機能、代謝変化、機能性とその作用について詳細に報告した。